

# みんなは、どう思ってる？

## 男女共同参画社会に関する 市民意識調査結果特集

### 特別編

市では昨年11月に、男女共同参画社会に関する市民意識調査を行いました。全体の傾向としては、性差にとらわれない自由な生き方を支持する一方で、育児などの具体的な事柄については、男女の役割分担意識が強く表れるなど、意識の矛盾が見られるものとなりました。

### 自由意見

### ご存知ですか？この言葉

●女性の負担が、家庭や社会などで大きい。若い人は理解があるが、年輩の人は男らしく、女らしくという考え方が強い。まだまだ時間がかかるなあと思う。学校での男女平等に関する勉強は大切だが、大人にも学ばせて。  
 (10代女性)

●自分に自信を持っている人は自ら道を切り開き、飛躍していく。まずは自分に自信をつける方が早いんじゃないかな。  
 (20代男性)

●男性・女性それぞれ違う良さを持っている。上手に役割分担し、協力して住み良い社会をつくっていくべき。ただ、権利は同じ。違いは認めつつ、働強い気持ちがあるのに、女性だからその権利が制限されたり、子育てや介護などの問題で、働けなかったりするようでは困る。  
 (10代女性)

●文化的・社会的につくられる性別、性差のこと。男女の生物学的性差「セックス」とは、区別して使われず、「ジェンダー」とは、区別して使われます。「女である」「男である」という性別の認知から、男女に割り当てられる役割期待や象徴的・記号的な位置づけなどを含む、幅広い意味で使われます。この言葉は、一九七〇年代から使われるようになりました。ジェンダーの概念が広まるにつれ、社会的に割り当てられた性別概念や性別役割分業観は

◇結婚や家庭生活について  
 ①「男は仕事、女は家庭」という考え方に、「どちらかといえばそう思う」と回答した人の割合が多く、男女共同参画に関する意識が進んでいるようです。年代別では、年齢が下がるほど「そう思わない」人の割合が多くなり、この傾向は、この自治体のデータにも見られるものです(表1)。  
 ②「夫も平等に家事や育児を担当した方がよい」と考える人は、割合弱。表1の結果に近いデータが得られました。男女の数字を見ると、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計はどちらも同程度ですが、内容を見ると「そう思う」と「どちらかといえば」との割合が男女で逆転します。これは、女性の方が積極的に「そう思う」と回答している(表2)。

表1-1 男は仕事、女は家庭を守る方がよい

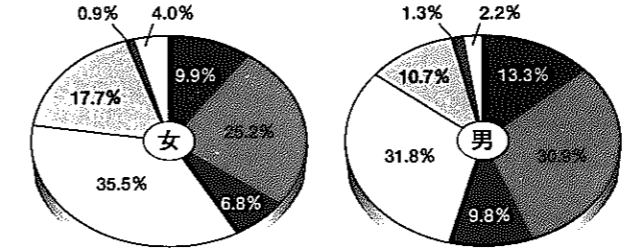
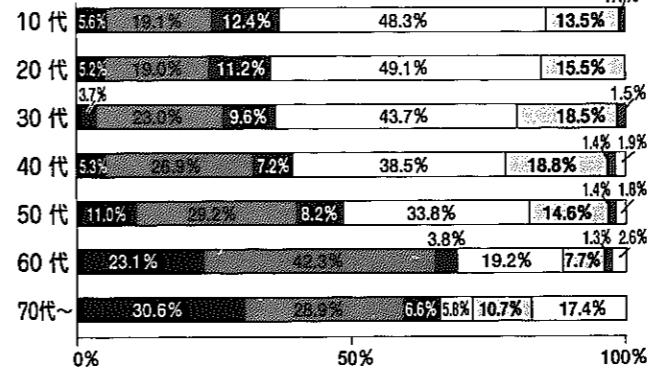


表1-2



③「女性が仕事を持っていいが、家事育児をきちんとすることが大事だ」と考えている人が7割以上います。これは、①、②と矛盾しています。②では、「夫も平等に家事育児をしてほしい」という願望が含まれており、表3では、「これまで家事育児を任せられてきた」という自負、現実が反映されているためだと推測されます。例えば、50～60代「そう思う」が極めて多くなっています。これは50代が、それを強く要求された世代であり、60代はすでに定年を迎えた世代で、これまで頑張ってきた世代であるためです。

表2-1 夫も平等に家事育児をした方がいい

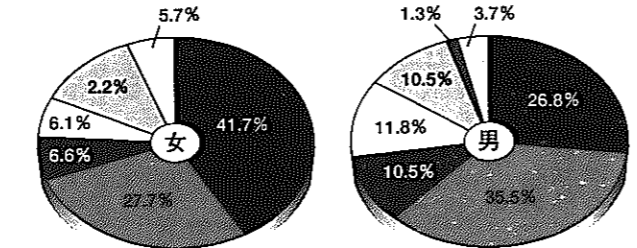
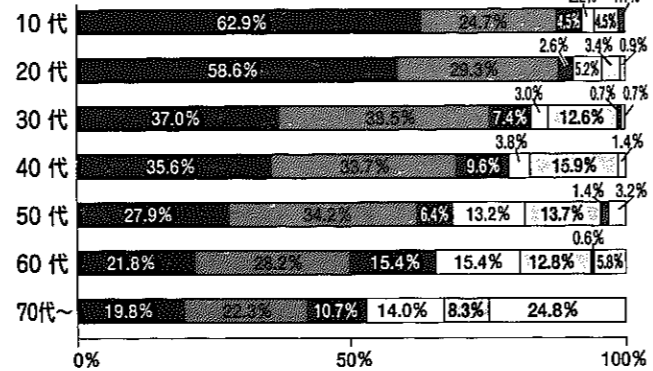


表2-2



◇言葉の認知度  
 このアンケートでは、男女共同参画に関する、いくつかの言葉の認知度も調査しました。その多くで、7割から8割の人が「知らない」と回答しています。言葉の認知度は非常に低いことが明らかになりました。これは、政策の浸透度が低いことの表れです。市は、これからも粘り強い啓発活動をしていきます。

表3-1 女性が仕事を持つのはよいが、家事育児をきちんとすることが大事だ

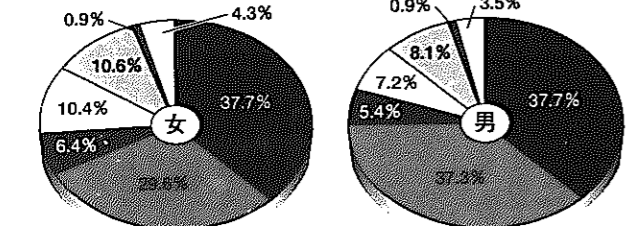
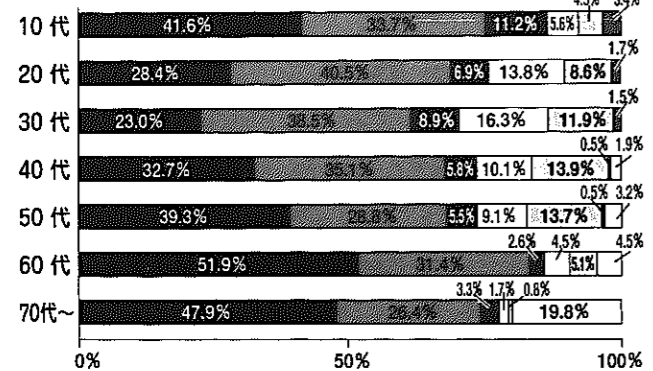


表3-2



### ここからがスタート

意識調査の結果から浮かび上がってきたのは、「総体的には性別にとらわれず、しかし具体的には男女の役割分担意識をしっかりと持っている」白根市民像です。そこには、これまで「男(女)はこうあるべきだ」という「当たり前」とされてきた考え方が、変化しつつある様子が見て取れます。男性も女性も、性別にとらわれず、生き生きと暮らすことができる社会づくりへの取り組みは、まだスタートしたばかりです。

この調査結果をもとに、市では男女共同参画基本構想を策定するための準備を進めています。その様子や、このほかの調査結果については、引き続き「おしゃべりさん」のコーナーで紹介してまいります。

ここに紹介した調査結果は、ごく一部に過ぎません。詳しいデータが必要な人は、生涯学習課へお問い合わせください。

■問い合わせ 生涯学習課(白根学習館内)  
 ☎372・5533

●基本的には、女性でしかできない部分、男性でしかできない部分がある。そのことが性別とは異なるが、その中で男性が女性を軽視することのない社会を望む。また、女性も「女だから」という気持ちで社会生活を送ってほしくないと思う。  
 (30代男性)

●特に農村部では、昔の習慣にとらわれていてと思う。若い人の考えを理解してもらうには、少々の時間がかかるだろう。70代の人に理解してもらうには、難しい問題ではないかと思う。  
 (40代女性)

●今回の施策の計画は本当に良いことだと思います。これと平行して、出生率の低下に歯止めがかかることも併せて計画に入れてほしいと思う。  
 (50代男性)

●決まったものではなく、社会や文化によって違ったものになることが認識されるようになりました。

★ドメスティック・バイオレンス  
 夫や恋人など、親密な関係にある異性から受ける暴力をいい、頭文字をとって、「DV」ともいわれています。少し前の日本では、夫婦間の問題に他人が介入すべきでないとされ、夫婦間の暴力に関しては、当事者をはじめ警察や検察、裁判所なども犯罪との認識がありませんでした。これにより、我慢を強いられ、事態はほとんど表面化しませんでした。しかし、こうした暴力は男女間の歴史的な不平等の表れで、人権問題であると認められたことから、法整備を含めた対応措置をとることが盛り込まれた「DV防止法」が二〇一一年十月から施行されました。